
16話 赤い汗

吉川明人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

16話 赤い汗

【Nコード】

N2091K

【作者名】

吉川明人

【あらすじ】

ショートショートです。

水面に半身を浮かべてゆっくり近づく影がある……ワニではない。もっと丸みを帯びた姿、カバだ。

彼の向かう先にはいつものエサ場がある。

豊富な水草があり、周辺の動物たちの多くが利用しているが、そこは同時に彼ら草食動物だけのエサ場ではない。彼らを狙ってやってくる肉食動物たちのエサ場でもあった。

エサ場とは、自らを生きながらえさせるために何かを喰い、そしていつ自分がその逆の立場になるかも分からない生死の境界線上を意味し、喰うものも喰われるものも、命を紡ぐという意味では同じラインの上にいる。

エサ場に着いたカバはより慎重に辺りの様子を窺う……今日は安全そうだ。

他の動物や鳥たちものんびりと食事をしている。

カバも早速エサを食べ始めた。

いつもと変わらない草を食べていると、いつもと違う味がしてきた。

仲間の動物たちの血が混じったものではないが、決して食べ慣れている味ではない。

危険だ！

カバはすぐ食べるのをやめ、エサ場から離れることにした。その直後、背後からいくつもの銃声が聞こえた。

もうあのエサ場は使えない。1度でも人間を見かけたエサ場には近寄らないようにしてこれまで生き伸びてきたのだ。

カバは冷や汗をかきながら、新しいエサ場を探して立ち去った。

「おい、確認されていたカバが1頭、捕獲されていないな」

「うまく逃げ出したか、いや、この場合ヘタに逃げ出したというベ
きか。」

もうすぐこの地域は生き物が生きていけなくなるんだ。今のうち
に、できるだけ保護しなければならぬっていうのに」

「ああ、世論では動物より人間の補償を叫ぶ声が高まっている。オレ
たちもあと何回こうして保護に来られるか……」

「ところでカバの汗って、赤いの知ってるか？」

「血がにじむような思いで生きてるってか？ 絶対ウソだろう」

「本当だって。血じゃなくて汗らしいんだけど」

「ふん、信じられないな」

「じゃあ今夜の飲み代を賭けるか？」

「いいとも、もちろんだ」

麻酔で眠らせた動物たちをトラックに慎重に乗せ終わった男たち。

……喰うか喰われるかの生死の境界線上に立ったことのない男た
ちの頭には、救えなかったカバのことなどすでない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2091k/>

16話 赤い汗

2011年1月18日22時17分発行